



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	古典派経済学と恐慌論争(3):リカードとマルサス
Author(s)	森下, 宏美
Citation	経済學研究, 36(3), 79-90
Issue Date	1986-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31748
Type	departmental bulletin paper
File Information	36(3)_P79-90.pdf



古典派経済学と恐慌論争(3)

—— リカドゥとマルサス ——

森 下 宏 美

III リカドゥーマルサス論争の 分析(2)

前章では、リカドゥーマルサス論争の分析の手始めとして、経済循環に関する両者の認識の相違と、有効需要の問題への異なった接近方法とをとり出してみた。その要点をごく大まかに述べると次のようになる。即ち、生産の立場から、個々の経済主体を「単一の主体」(社会)と同じ性格のものとしてとらえ、需要と供給の同一性を主張するリカドゥと、消費の立場から、諸財貨の消費(個々人の嗜好)への適合性を独自に強調するマルサスとの対立であった。

本章の課題は、経済循環の認識と有効需要の問題への接近方法とを規定しているこれら2つの立場の対立を、「不生産的消費の担い手」という問題にかかわる両者のやりとりの中に再度確認することである。その意図するところを、簡単に述べておこう。

はじめに確認しておかねばならないのは、「不生産的消費の担い手」をめぐる両者の議論の内容の特質である。というのも、それは、「不生産的消費者の必要性」をめぐる周知の議論とは区別されるべき独自の内容をもっていると考えられるからである。あるいは、それは、「不生産的消費者の必要性」に関するかなり広範囲にわたる論戦の一局面であるとも言えようが、その局面の細部に、少しく立ち入ってみたいのである。「不生産的消費者の必要性」をめぐる

両者の対立については、その内容を次のようにおさえることができよう。つまり、資本蓄積の過程において、資本家と労働者の需要のみでは、増大した生産物に対する有効な需要を形成しえないから、もっぱら消費をこととする「不生産的消費者の一集団」が必要だと説くマルサスと、需要と供給の同一性論に立脚してマルサスを批判するリカドゥとの対立である⁶³⁾。それに対して「不生産的消費の担い手」をめぐる両者のやりとりは、上の議論と密接にかかわりながらも、やや趣きを異にしている。そこに現われているのは、労働者階級による不生産的消費と不生産的階級によるそれとに対する、両者の対照的な態度である。つまり、労働者階級(および資本家階級)の不生産的消費については、資本蓄積過程の一契機としてそれを認めるが、不生産的階級についてはそれを認めないとするリカドゥと、逆に、不生産的階級の消費は認め、労働者階級の不生産的消費はこれを否認するマルサスとの対立である。「不生産的消費の担い手」をめぐるリカドゥとマルサスの対立とは、こうしたことを指している。

本章では、この問題をめぐる両者の論争に少しく立ち入ることによって、先に示した2つの立場——生産の立場(リカドゥ)と消費の立場(マルサス)——が、経済諸主体についての両者の認識をそれぞれどのように規定しているかを探ってみたい。以下、順を追ってみてゆこ

63) 拙稿「古典派経済学と恐慌論争—リカドゥとマルサス—(2)」『経済学研究』(北大)第36巻第1号、1986年、参照。

う。

1. 「不生産的消費の担い手」をめぐる対立

本節では、さきに述べた「不生産的消費の担い手」をめぐるリカードとマルサスの対立が、一般的供給過剰論争のいかなる文脈において表面化してくるのかを跡づけておきたい。

既にみたとおり、マルサスの「需要・供給の原理」とリカードの「販路説」は、経済循環の認識における全く対照的な立場を表わしていた。ところで、マルサスにとって「需要・供給の原理」は、あらゆる経済理論がそれに立脚すべき根本原理としての位置を占めるべきものであった。その点でいえば、彼の利潤論もまた例外ではない⁶⁴⁾。というのも、マルサスによるリカード利潤論批判の中心は、生産物の供給増大・消費者需要の減退による価格の低下が利潤の下落を惹起すること、この点の強調にこそあったと言えるからである⁶⁵⁾。したがってマルサ

スの場合、供給過剰 (glut) と利潤の下落は表裏の関係にある事柄としてとらえられるわけである。それを端的に物語っているのは、次に掲げる彼の叙述である。

「〔資本蓄積によって増大した貨物は、それ自身に対する有効需要を見出せないから一筆者〕貨物の価値は労働と比較して必然的に下落し、やがては利潤をほとんどゼロにまで低下せしめ、そしてしばらくのあいだそれ以上の生産を妨げるようになるであろう。しかし、これこそはまさに供給過剰という言葉の意味するところであり、しかもこの場合には、それは明らかに一般的であって部分的ではないのである。」(T. R. Malthus, *Principles*, led., p. 354, 邦訳 (下) 164頁。)

このように、一般的供給過剰と利潤の下落を表裏一体のものとしてとらえるマルサスに対して、リカードは、賃銀の騰貴こそが利潤下落の唯一の原因であるとする立場から反論を試みている。彼によれば、賃銀は、第1に、賃銀が支出されてゆく必需品の費用に、第2に、労働の需要と供給に依存している⁶⁶⁾。そのうえで彼は、第1の原因 (劣等地耕作の進展に伴う穀物価格の騰貴による賃銀上昇) によるものであれ、第2の原因 (労働に対する過度の需要による賃銀上昇) によるものであれ、利潤の下落は、停滞や一般的供給過剰をなんらまねくものではないと述べている。

本章の課題との関連で特にとりあげたいのは、後者の場合 (第2の原因による利潤下落の場合) についてのリカードの説明である⁶⁷⁾。

64) マルサスはこう述べている。「……需要および供給の原理および競争の原理から免れようとするどんな利潤論も、正確さには近づきえないのである。」(T. R. Malthus, *Principles of Political Economy*, led., 1820, p. 336, 小林時三郎訳『経済学原理 (下)』岩波文庫, 1963年, 139頁〔以下, T. R. Malthus, *Principles* led., p. 336, 邦訳 (下) 139頁, と略記する。])

65) 大村照夫氏は、マルサス「利潤論」の基本構成について次のように述べられている。「マルサス『利潤論』は、生産物の価値に影響を及ぼす要因=消費者需要と前払 (生産費) に影響を及ぼす要因=資本・労働比率との二つの側面から同時に展開されている。これに加えて究極的な利潤に影響を及ぼす『勤労の生産性』(利潤の制限原理)を加えることによって、リカード利潤論に対決しようとする。」(大村『マルサス研究』ミネルヴァ書房, 1985年, 125頁。) また、リカードとの対決点については、次のように述べられている。「マルサス『利潤論』の形成過程においてリカードがマルサスの主張する規制原理利潤を承認してしまった以上、マルサスはリカード利潤論を批判するためには……利潤に影響を及ぼす第3原因〔消費者需要一筆者〕を『利潤論』の支柱にすえねばならない。」(同上書, 143頁。)

66) Cf. D. Ricardo, *Letter to Malthus*, in, *The Works and Correspondence of David Ricardo*, edited by Piero Sraffa with the collaboration of M. H. Dobb, Cambridge University Press, Volume VII, 1952, p. 72, 中野正監訳『デイヴィッド・リカード全集 第VII巻』雄松堂書店, 1971年, 83頁, 参照。〔以下, D. Ricardo, *Letter to Malthus*, *Works* VII, p. 72, 邦訳, 83頁, と略記する。〕

67) 第1の原因による利潤下落の場合に関するリカードの説明については, D. Ricardo, *Letter to Malthus*, *Works* IX, p. 25, 邦訳, 27頁, 参照。

彼の説明を整理すればこうなる。労働に対する過度な需要から生ずる労働者への過度な支払いによって、本来資本家に帰属すべき部分が減少するとしても、労働者自身がその国の不生産的消費者となることによって、増大した生産物に対する需要者になるのだから、一般的供給過剰なる事態は起こり得ず、社会全体にとってはなんらの弊害ももたらされない⁶⁸⁾。さらに、資本蓄積の動機が一時的に失われるこのような事態は、労働者数の増加か、あるいは資本家の側での「もっと気前のよい不生産的支出」によって打開される⁶⁹⁾。

以上が、利潤下落と一般的供給過剰を表裏一体のものとしてとらえるマルサスに向けられたリカードの批判の概要であるが、ここで確認しておきたいのは次の点である。つまり、労働需要の超過状態という資本蓄積過程の一局面において、労働者と資本家による不生産的支出が、過程の一契機として組みこまれていることである。ここに、「不生産的消費の担い手」の問題についてのリカードの理解が表明されているわけである。

一方、リカードのこうした主張に接したマルサスは、それに対して次のような批判を加えている。リカードの言う「労働者数の増加」という救済手段は、自由に用いることのできる性質のものではないから⁷⁰⁾、結局のところ、資本家（および地主）の不生産的支出に頼らざる

を得ないことになる。そしてもしこれが正しい結論だとすると、不生産的消費者の必要性を否認する彼の態度とのあいだに齟齬が生ずると言うのである。

「しかし、私がまったく正しいと思うこの結論は、あなたがお手紙の他の箇所で、消費の増加をこの国の営業の停滞への救済策とすることに対して提出なさっている強い抗議とは、まず一致しないように思われます。（傍点部強調はマルサス）」（T. R. Malthus, *Letter to Ricardo*, Works IX, p. 21, 邦訳, 23頁。）

さらにマルサスは、労働者階級による不生産的支出が、増大した生産物に対する需要を形成するというリカードの推論に対しても異論を唱えている。それを整理すれば次のようになる。資本蓄積の過程において、資本家の失うところの全てが労働者の得るところとなれば、たしかに「富の増進」に対する妨げは、リカードの言うとおりの一時的なものであろう⁷¹⁾。しかし、労働者階級による極めて大きな消費というものはほとんどあり得ないことである⁷²⁾。というのは、労働者階級による不生産的支出は、資本家のそれとはちがって、全生産物のうち資本の置きかえに向けられるべき部分の蚕食に他ならないからである⁷³⁾。

マルサスは、およそ以上のような論理をもってリカードを批判するのであるが、それに対するリカードの再度の反論をみてみよう。その要点はこうである。労働者階級の労働に対する正当な報酬を大きく越える消費が、富の生産に対する刺激を減じ、国内商業や外国貿易を大いに減退させるのは、彼らによる消費の一半が不生産的消費であるからに他ならない。だとすれば、マルサスが強調してやまない不生産的消費者による消費をもってしても、かかる事態は

68) Cf. D. Ricardo, *Letter to Malthus*, Works IX, pp. 15-18, 邦訳, 17-19頁, p. 24, 邦訳, 26頁, —, *Notes on Malthus's Principles of Political Economy* [以下, *Notes on Malthus* と略記する] Works II, p. 308, 邦訳, 394-395頁, pp. 312-313, 邦訳, 399-400頁, 参照。

69) Cf. D. Ricardo, *Letter to Malthus*, Works IX, p. 17, 邦訳, 19頁, p. 26, 邦訳, 28頁, 参照。

70) マルサスが、労働者数の増加という手段は自由に用い得ないものであるという場合、彼がその根拠として持ち出してくるのは、人口の性質上、16年から18年の経過をまたなければ、労働者の増大は市場にもたらされえない、ということである。（Cf. T. R. Malthus, *Principles*, 1ed., p. 357, 邦訳 (下) 169頁, 参照。）

71) Cf. *Ibid.*, p. 369, 邦訳 (下) 186頁, 参照。

72) Cf. *Ibid.*, p. 473, 邦訳 (下) 339頁, 参照。

73) Cf. T. R. Malthus, *Letter to Ricardo*, Works IX, p. 22, 邦訳, 23-24頁, 参照。

なんら解決されない⁷⁴⁾。つまり、不生産的消費のもたらす直接的な効果という点では、労働者階級によるそれも、不生産的階級によるそれと同じというわけである。しかし、それを認めたうえでなおリカードが、不生産的消費者による消費ではなく、労働者階級の不生産的支出を、資本蓄積過程の一契機としてとり入れてくるのは次のような判断に基づいてのことである。労働者に過度の支払いがなされた場合、資本家は、収入から貯蓄することをやめ、あるいは資本の一部を取りくずして自らの不生産的支出を増やす。資本家たちがとるこうした「新しい過程」の結果、労働への支払いにあてられる基金は減少するが、それでも労働者は、以前に受け取っていたものに比べればより大きな支払いを受けとることができるから、全体としての富裕は増すだろう、と言うのである⁷⁵⁾。このように、労働者と資本家による不生産的支出は上述の過程を経て不断に解消されてゆくのにに対し、不生産的階級による消費は、こうした過程の埒外にあるが故に、資本蓄積（「富の増進」）の過程の一契機たりえないことになる。労働者と資本家の不生産的消費は認めるが、不生産的階級によるそれは認めないとするリカードの態度は、以上のような考えに裏づけられているのである。

さて、「不生産的消費の担い手」をめぐるリカードとマルサスの対立が、一般的供給過剰論争のいかなる文脈において表面化してくるかは、およそ以上のように跡づけることができよう。「需要・供給原理」に立脚するマルサスの利潤論に端を発し、利潤下落と一般的供給過剰との関連をめぐってかわされた両者の議論の中に、労働者階級および不生産的階級による不生産的消費に対する全く対照的な態度を確認でき

たわけである⁷⁶⁾。そこで次の課題は、こうして確認された両者の対立的な姿勢に若干の考察を加え、この対立の中に、経済主体の理解における生産の立場と消費の立場を探り出すことである。節を改めて論ずることとしよう。

2. 経済主体の2様の把握——生産の立場（リカード）と消費の立場（マルサス）——

まずはじめに、リカードの場合についてみてみよう。

既に述べたように、彼が労働者階級による不生産的消費を認めるのは、資本家が推し進める「新しい過程」の結果それが解消されてゆくか

76) リカードは、『原理』第21章において、「食物の価格が低くて、しかも資本の蓄積が利潤の低下を伴うのは、「労働維持のための基金が人口よりもはるかに急速に増加する場合」であるとし、その際、「仮に、各人が、奢侈品の使用をさしひかえ、蓄積だけに専念すれば」、増大した必需品に対する供給過剰が生ずるだろう、と述べている。(Cf. D. Ricardo, *On the Principles of Political Economy, and Taxation*, [以下, *Principles*, と略記する] *Works* I, pp. 292-293, 邦訳, 337頁, 参照。)

マルサスは、リカードのこの叙述をとらえて彼の「譲歩」とみなし、仮にリカードの言うとりであれば、「一般的主張として、資本はけっして過剰にはならない」と断ずることはできないとしている。(Cf. T. R. Malthus, *Principles*, led., p. 357, 邦訳 (下) 168-169頁, 参照。)しかし、注意を要するのは、この時マルサスが、リカードの付していたひとつの限定、即ち「各人が奢侈品の使用をさしひかえ……るならば」という限定を無視していることである。この点に関して羽鳥卓也氏は、「マルサスは後々までリカードの議論の真意を理解しえなかった」と述べられている。その理由について氏は、マルサスにとって巨額の蓄積は、それ自体奢侈品需要の減少を意味するからだ、と指摘されている。(羽鳥卓也『古典派資本蓄積論の研究』未来社、1963年、188頁, 参照。)

しかし、リカードの先の叙述の文脈に照らせば、彼が付した限定は、「労働者階級の不生産的支出がなければ」と読み換えるものであり、したがって、マルサスのとった態度は、労働者階級の不生産的支出に対する彼の理論的立場に由来するものであると考えるべきであろう。

74) Cf. D. Ricardo, *Notes on Malthus, Works* II, pp. 430-431, 邦訳, 546-548頁, 参照。

75) Cf. D. Ricardo, *Letter to McCulloch, Works* VIII, p. 217, 邦訳, 245頁。——, *Letter to Malthus, Works* IX, pp. 24-25, 邦訳, 26-27頁, 参照。

らであり、しかもその過程を通じて全体の富裕が増すと考えられたからである。

ところで、リカードゥの場合、労働者階級の不生産的消費が、以上のようなかたちで資本蓄積過程の一契機として位置づけられうる根拠は何であろうか。それは、労働者階級と資本家階級とのあいだで不断にとり行なわれている交換である。次に掲げる彼の一文をみてみよう。

「……資本と労働とは、同時にどちらも豊富に存在するということは不可能であって、そのわけは、いかにこの両者が増大せしめられようとも、その一方はつねに他方を購買するからである……。 (傍点筆者)」(D. Ricardo, *Notes on Malthus, Works* II, p. 241, 邦訳, 309頁。)

この一文は、資本の過剰と労働の過剰の同時存在の可能性を主張するマルサスへの反論として書かれたものであるが⁷⁷⁾、そこには、資本家と労働者との関係についての、リカードゥの一般的表象が述べられているように思われる。つまり、リカードゥの場合、資本家と労働者は、生産者—販売者—購買者—消費者という役割の転換を不断に行ないながら、ともに生産的階級として等質的な世界を形づくっているという表象である。もちろん、等質的な世界と言っても、労働者と資本家は、生産において果たす機能も異なれば、また労働生産物の取得関係において対立的でもある。リカードゥがそうした事実を知らなかったと言うのではない。むしろ、そうした事実を認めながらもなお、資本家と労働者が、経済主体のあり方という点でのひとつの共通性、即ち、両者がともに生産から消費に至る一連の諸契機を一身に担うべき存在としてあるという共通性において理解されている点をあえて強調しておきたいのである。言うまでもなく経済主体のこうしたあり方は、欲望の主体

としての人間が、他ならぬ生産の主体として振るまうことによって獲得せられるものであって、経済主体のそうした理解の中に、リカードゥの生産の立場を見てとれると思うのである。したがって、こうした理解からすれば、もっぱら消費をこととする不生産的消費者は、生産的階級の演ずる不断の役割転換に関与する存在ではなく、生産的階級が形づくる等質的な世界の構成員たり得ないわけである。前節でみた「不生産的消費の担い手」についてのリカードゥの理論的立場、そこからするマルサスへの批判は、上述のような経済主体の理解に支えられたものであると言えよう。

以上が、経済主体のあり方についてのリカードゥの理解の大筋である。そこで次にマルサスの場合をみてみよう。はじめに、マルクスの次の叙述を参照しておきたい。

マルクスは、リカードゥ派の手になると目される、匿名のマルサス批判の書⁷⁸⁾をとりあげつつこう述べている。

「……生産財源と消費財源、供給の財源と需要の財源、資本の財源と消費の財源が、まったく同一の財源——『生産された諸商品の総量』——であるということからの帰結として、総財源は、これらのいろいろな部類のあいだでどのように配分されようともよい、ということにはならない。」(K. Marx, *Theorien über den Mehrwert*, in, *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Bd. 26, Teil 3, Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Dietz Verlag, Berlin, 1965, S. 55, 大内兵衛・細川嘉六監訳『マルクス・エンゲルス全集』第26巻第3分冊, 大月書店, 1970年, 70頁, [以下, K. Marx, *Theorien, Werke* Bd. 26, Teil 3, S. 55, 邦訳, 70頁, と略記する。])

78) 『近時マルサス氏の主張する需要の性質ならびに消費の必要に関する原理の研究……。 (An Inquiry into those principles, respecting the nature of demand and the necessity of consumption, lately advocated by Mr. Malthus, 1821)』

なお、この著作の作者は、S. ベイリー (Samuel Bailey, 1791-1870) であるとの推定が、T. ソウエルによってなされている。(Cf. T. Sowell, "Samuel Bailey Revisited" *Economica*, Nov. 1970)

77) 資本の過剰と労働の過剰の同時存在の可能性に関するリカードゥの見解については、D. Ricardo, *Letter to McCulloch, Works* VIII, p. 182, 邦訳, 204頁, —, *Letter to Malthus, ibid.*, p. 185, 邦訳, 208-209頁, を参照されたい。

マルサスは、マルクスがここに提示した問題に、即ち、社会的再生産を可能にする諸財源の配分という問題に、諸階級が消費者として演ずる役割の相違に着目しながら迫ろうとしている。例えば、前節でみたように、労働者階級による不生産的消費に反対する際、彼がその論拠としたのは、労働者階級による不生産的消費は、本来資本にふり向けられるべき財源の蚕食に他ならない、ということにあった。マルサスのこうした立論を支えていたのは、まさしく、さきに提起した問いの自覚であって、彼は、諸階級の消費者としての役割の相違を論ずることによって、その問いに迫ろうとしたわけである。このようにマルサスの場合、経済主体はもっぱら消費者としての役割においてとらえられ、そこからリカードとは異なった推論が提示されてくるのであり、その点に、経済主体の理解における彼の消費の立場をみてとりたいと考えるのである。

これまでみてきたように、「不生産的消費の担い手」をめぐるリカードとマルサスの対立は、経済主体の把握における2つの立場——生産の立場と消費の立場——の存在を、きわめて明瞭なかたちで指し示していると言える。しかしここでは、リカードとマルサスの経済主体の把握を全面的に論じたわけではない。したがって、本節での考察がいかなる性質のものであるかについて、なお述べておく必要があるだろう。節を改めて述べることにしよう。

3. 小 括

本章では、一般的供給過剰をめぐるリカードとマルサスの論争の中から、「不生産的消費の担い手」についての両者の対照的な認識をとり出すことによって、経済諸主体の把握における生産の立場と消費の立場を確認した。それは、前章でみた、経済循環に関する両者の認識と照応するものである。その意味からすれば本章での考察は、経済循環の中に登場するかぎり

での経済諸主体のあり方についての両者の認識を、「不生産的消費の担い手」という問題をめぐるやりとりの中に探ったものだということになる。そのさい、「不生産的消費の担い手」という問題に着目したのはそれなりの理由がある。以下にその理由を述べておこう。

前章でみたとおり、彼らが眼前に見出している市場（需給範疇）は、すぐれて個人的消費のカテゴリーとしてとらえられていた。市場（需給範疇）がそのようなものとしてとらえられるならば、「富の増進」によって惹き起こされる市場の拡大とは、個人的消費の圏域の深化、拡大以外の何ものでもない。

ところで、個人的消費が向かう対象は、必需品と奢侈品とに大別できるのであるが、彼らの場合、必需品と奢侈品とに向けられる人間の欲望に関して、一般に次のような観念が支配的である。つまり、必需品に対する欲望は、人間の「胃の腑」の大きさによって制限されているが、奢侈品に対する欲望は無限だとする A. スミス以来の観念である⁷⁹⁾。こうした観念に加えて、さらに、利潤生産にとってのひとつの条件が、人口の大多数をなす労働者階級の消費制限（つまり彼らの消費が必要生活手段の消費に抑え込まれているということ）にあるという認識をも勘案すれば、「富の増進」に伴う市場の拡大は、奢侈品消費、あるいは召使い等の不生産的労働者の雇用といった、いわゆる不生産的消費を、多かれ少なかれ必要としなければならないこととなる⁸⁰⁾。

しかし、市場の拡大についてのこうした認識は、その一方で、「富の増進」に関する次のような考えと抵触せざるを得ない。つまり、一国

79) Cf. D. Ricardo, *Principles, Works* I, p. 292, 邦訳 336-337頁、参照。

80) 市場の拡大についてのこうした認識と対比されるべきは、マルクスのそれであろう。マルクスは、社会的総資本の再生産と流通を論ずることによって、個人的消費から相対的に自立した、生産手段生産用の不変資本部分 (Ic) の独自の運動が、市場の拡大の主動因たりうることを示した。(Vgl. K. Marx, *Das Kapital* II, *Werke* Bd. 24, SS. 351-518, 邦訳 429-650頁、参照。)

の利益のためには、できるだけ多くのものを生産的に使用しなければならない、という考えである⁸¹⁾。こうした事情に照らしてみた場合、「不生産的消費の担い手」をめぐるリカードゥとマルサスの議論は、市場の拡大についての認識と、資本蓄積の論理との狭間で、不生産的消費の問題を、彼らがどのように処理しようとしたかを知ろうと、恰好の素材になりうると思えたのである。

「不生産的消費の担い手」という問題に的をしばって考察を進めたのは、経済循環に登場する経済諸主体の把握におけるリカードゥとマルサスの対立が、そのことによってより鮮明に浮かびあがると考えたからである。

IV リカードゥーマルサス論争の対立構図

本章では、これまでの考察をふまえ、リカードゥーマルサス論争の対立構図を示し、当面の総括としたい。ただしそれは、ある限られた視角からのみなされるものである。その視角とは、《市場論的世界》と《分配論的世界》との位相差に関する両者の認識を、資本蓄積と再生産という基本問題に照らして問うてゆくという、本稿第I章で提示した基礎視角である。

《市場論的世界》と《分配論的世界》との位相差とは、ひと口で言えばこういうことであった。第1に、経済主体のあり方という点から言えば、前者においては、各人は、生産者—販売者—購買者—消費者というように、絶えずその役割を取り換えているのに対し、後者においては、個々人は、生産における機能と所得範疇を異にする、資本家、労働者、土地所有者という、いずれかの階級に属しており、そこでは、

例えば労働者は、生産者ではあるが商品の販売者ではないというように、前者でみられるような役割の転換は行なわれていない。第2に、経済活動の目的という点から言えば、前者においては欲望の充足こそが唯一の目的であるのに対し、後者においては、その目的は利潤の獲得にあり、人間の欲望は、利潤範疇の存在を前提とする有効需要として存在してはじめて充たされるのである⁸²⁾。

ところで、こうした、両世界の位相差についてのリカードゥとマルサスの認識を、資本蓄積・再生産という問題に照らして問うという場合、本稿でのこれまでの考察からすれば、経済循環およびそこに登場する主体の理解の仕方の中に、この位相差の認識を探るということになる。さらに言えば、経済循環およびそこに登場する経済主体の理解における2つの立場——生産の立場（リカードゥ）と消費の立場（マルサス）——が、先に示した両世界の位相差についての彼らの認識を、どのように規定しているかを探るということでもある。こうした作業を通じて、当該論争の対立構図を示してみたいと考えるのである。そこでまずはじめに、リカードゥの場合からみてみよう。

1. リカードゥの場合

はじめに、リカードゥの経済循環に関する認識に立ち返ってみよう。リカードゥにおいては、経済循環に登場する経済諸主体は、自らのうちに生産と消費を統一している「単一な主体」（社会）と同一視され、需要と供給の一致という命題（販路説）も、そこに根拠をもっていた。さらに、各経済主体間でとり行なわれる交換は、「単一な主体」（社会）が、自らの欲望の編成に応じて配分した諸労働の交換に他ならなかった。「生産物は生産物をもって買われる」という命題が、単なる物々交換の論理ではな

81) 例えばマルサスは、富の増進が、収入の資本への転化以外の何か他の方法で行なわれうとするローダーデールに反対し、「資本の継続的増大なしに富の永続的かつ継続的増大がおこりえないことは、たしか真実である」と述べている。(Cf. T. R. Malthus, *Principles*, led., pp. 351-352, 邦訳 (下) 156頁参照)。

82) 拙稿「古典派経済学と恐慌論争—リカードゥとマルサス—(1)」『経済学研究』(北大) 第35巻第3号, 1986年, 176-180頁, 参照。

く、上のような認識に支えられたものであることについては、既に述べたとおりである。

ところで、こうした「単一な主体」と同一視される主体とは、言うまでもなく、資本家および労働者という、生産的階級に属する者たちである。彼らが「単一な主体」と同一視されるのは、両者ともに、生産者—販売者—購買者—消費者という、一連の役割転換を不断に行ないながら、生産的階級として等質的な世界を構成している、と考えられたからであった。本稿では、リカードのこうした考えを指して生産の立場と呼んだのであるが、前章でみたとおりこの立場は、不生産的消費者の必要性を主張するマルサスを批判する際にも、一貫して保持されていたものであった。以上が、経済循環およびそこに登場する経済主体についてのリカードの認識の大筋である。

ところで、資本家と労働者が、生産的階級として等質的な世界を形づくっているという場合、その根拠が、生産者—販売者—購買者—消費者という不断の役割転換にあるのだとすると、彼らがこの過程でとり行う交換の内実が問われてこざるを得ない。つまり、資本家と労働者が、ある時は販売者として、ある時は購買者として立ち現われ、その立場を次々にとりかえる、ということの内実である。というのも、さきに述べたように、労働者は、商品の生産者ではあってもその販売者ではないという事実があるからである⁸³⁾。以下、この点についてもう少し

詳しくみてみよう。

前章第2節でみたように、リカードは、資本と労働の関係について、その一方はつねに他方を購買すると述べていた。そこには、生産的階級としての資本家と労働者が、交換者として対等に関係し合っているという、リカードの一般的な表象をみてとることができるのであった。

このようにしてリカードは、資本家と労働者の生産的階級としての等質性を主張するのであるが、さきに述べたように、労働生産物については、資本家と労働者の双方に、生産者=販売者としての規定を与えることはできない。この点をあえてとりあげるのは次の理由からである。つまり、「労働者は、労働生産物については、その生産者ではあっても販売者ではない」ということの事実が意味しているのは、「労働者は、労働の生産物を資本家に等価なしで引き渡す」という、利潤=剰余価値生産の根幹にかかわる事柄だからである。したがって、資本家と労働者とを生産的階級として等質化するリカードが、この問題をどのように処理しているか問われてくるわけである。

結論を言えば、リカードの場合、資本と労働の交換の見かけ上の「対等性・平等性」ととらわれて、労働生産物の取得における資本家と労働者の敵対的關係は積極的に問われることはなく、結局のところ利潤=剰余価値生産の問題は、「生産的階級による消費は、常にそれに費されたもの以上のものを生み出す」というかたちでしか論じられない。マルクスも指摘するように⁸⁴⁾、リカードの場合、労働者と資本家のあいだで分けられるべき完成生産物が、つまり利潤が常に前提され、そのうえで分配だけが問題とされるのである。

このようにリカードは、経済循環の認識において、資本家と労働者とも生産的階級として

83) マルクスは、「生産者と消費者とは同じである」というリカードの主張に対して次のような批判を加えている。つまり、機械や原料等の産業的に消費される商品については、労働者はその生産者ではあるが、しかしその購買者ではなく、したがってその「直接的な」消費者ではない、という批判である。そのうえで彼は、生産者と消費者との同一性の主張は、「消費という言葉の二義性と、この言葉を買入手という言葉と同一視することのまちがい（傍点筆者）」を含んでいる、と述べている。(Vgl. K. Marx, *Theorien, Werke* Bd. 26, Teil 2, SS. 518-519, 邦訳, 699-701頁, 参照。)本稿では、マルクスのこうした批判を敷衍して、直接的消費物品について、その生産者と販売者と

を「同一視することのまちがい」を、リカードの議論の中に見出したいのである。

84) Vgl., K. Marx, *Theorien, Werke* Bd. 26 Teil 3, S. 10, 邦訳, 6頁, 参照。

等質的にとらえる立場をとりつつも、しかしその立場は、「労働生産物については労働者は、その生産者ではあっても販売者ではない」という、利潤＝剰余価値生産の根幹にかかわる事柄との間に、ひとつの齟齬をきたしているのである。

経済循環およびそこに登場する経済主体についてのリカードの認識に照らしてみた場合、《市場論的世界》と《分配論的世界》との位相差の理論的処理の仕方は、およそ以上のようにおさえることができよう。

そこで次に、リカードとは対照的なマルサスの場合をみてみよう。

2. マルサスの場合

経済循環およびそこに登場する経済主体に関するマルサスの認識は、生産を最終的に完結させるものとしての消費を強調する立場にたつものであった。

彼は、この立場から、資本主義社会における諸階級の消費動向に着目し、有効需要の問題についてリカードとは異なった推論を行なったのであるが、その要点は次のように言うことができる。つまり、生産的階級としての資本家と労働者が行う消費は、それだけでは生産された商品に対する有効な需要を構成し得ず、したがって、もっぱら消費をこととする不生産的消費者の存在が不可欠である、ということである。

こうした彼の有効需要論への接近方法は、彼が強調してやまない「需要・供給原理」に基づくものであるが、同じくこの原理のうえにうち立てられた彼の利潤論も、それと同様の性格を有している。

彼の場合、資本と労働の不等価交換という、利潤＝剰余価値論の根幹にかかわる事柄は、労働者による消費の大きさという問題（つまり、労働者による消費が生活必需品の消費の水準に抑えられていることが、利潤生産の必要条件であるということ）のレベルに置き直され、そ

こから、利潤を与えるに有効な消費の存在を、不生産的消費者のうちに求めるのである。

ところで、マルサスのこうした議論を、《市場論的世界》と《分配論的世界》の位相差の認識という問題に照らしてみたとき、そこにひとつの難点が浮かびあがってくる。それは、生産に携わらない不生産的消費者は、消費すべき生産物を獲得するにあたって、利潤を含むより大きな対価を、どのようにして資本家に支払うのか、という問題である。これは、リカードがマルサスに対して、執拗に回答を迫った問題でもある⁸⁵⁾。

マルサスの議論からすれば、資本家は、生産物の一部を、不生産的階級に対価なしで引きわたし、不生産的階級は、しかるのちに、利潤を加えて、自ら消費すべき商品を資本家から買うということになる。しかしそれは不可能であろう。というのも、不生産的階級は、資本家に利潤として与えるべき等価を持ち合わせていないからである。もう少し詳しく見てみよう。

ある社会が生産したものは、すべて消費されるべく存在している。しかし、生産的階級、就中労働者階級による消費は、必需品のレベルに制限されているから、彼らが全てを消費することはできない。マルサスはこうした推論に導かれて、有効な需要を形成しうる不生産的消費者による消費を、利潤確保のための必要条件とみなしたのである。だが、こうした立論は、不生産的消費者が購買手段として用いることができるのは、結局のところ社会が生産したものの以外のものではありえないという事実によって反駁されざるを得ない。マルサスはこうした難点を意識してか、いわゆる「強度としての需

85) リカードは、例えば次のように述べている。

「……私になんらの代償もはらわれない他の人が私の財貨を消費することが、私にとってどんな利益になりうるのか？ こういった消費はどうして私に利潤の実現を可能にしてくれるのか？」(D. Ricardo, *Notes on Malthus, Works II*, p. 423, 邦訳, 538 頁。)

要」⁸⁶⁾なるものを持ち出してくる。「強度としての需要」とは、消費せんとする意思の強さのことであるが、彼は、不生産的階級の中に強く存在しているこの意思こそが、資本家の所有する商品の価値を高め、利潤獲得を可能にすると説くのである⁸⁷⁾。しかし、この立論をもってしても先の難点は解決されない。何故なら、資本家の商品の価値が不生産的階級の消費意思によって高められたにしても、彼らは、高められた価値に見合うだけの購買手段を持ち合わせていないからである。仮にあるとすれば、それは、彼ら以外の何者かの消費意思によって彼らの購買手段の価値が高められるからだ、ということになろう。だがマルサスの想定からすれば、そのような強い消費意思は、不生産的階級以外には持ちあわせていないのである。

このように、経済循環およびそこに登場する経済主体についてのマルサスの認識を支えている消費の立場は、同じくその立場のうえにうちたてられた利潤論において、ひとつの隘路に陥らざるを得ない。これを、《市場論的世界》と《分配論的世界》の位相差ということに即していえば、次のようになる。つまり、生産をせずにもっぱら消費に専念する階級の存在を、利潤の必要条件とする彼の立論は、社会によって生産されたものだけが購買手段になりうるという論理によって反駁される、ということである。

さきに述べたように、マルサスは、消費の立場に立つことによって、資本主義的再生産を可能にする諸財源の配分という問題に迫ろうとし、その視角からリカード批判を試みたのであるが、しかしそれは、あくまでも消費の立場に立つものであったが故に、以上のような難点をかかえこまざるを得なかった、と言うことが

できよう。

3. 小 括

本章では、リカード—マルサス論争の対立構図を、経済循環およびそこに登場する経済主体の理解における、生産の立場（リカード）と消費の立場（マルサス）との相違に着目しつつ、それらが、《市場論的世界》と《分配論的世界》の位相差に関する両者の認識を、どう規定し、制約しているか、という角度から論じてみた。しかも、そこに示された両者の対立は、利潤＝剰余価値論という、分配理論の要をなす主題との関連で、双方ともに理論上の隘路をかかえこんでの、いわば両疎みの構図をうちに含んでのものであった。リカード—マルサス論争が、互いに他を止揚し得ない抽象的対立たらざるを得なかったといわれる理由の一端も、以上のような対立構図に求めることができよう。本節では、以上に述べてきた、リカードとマルサスの対峙の構図を、次に掲げるマルクスの一文に即して、再度確認してみたい。マルクスは次のように述べている。

「リカード学派がマルサス学派とまったく同様に必要と考えていることは、労働者が自分で自分の生産物を取得することなく、その一部が資本家に帰属し、それによって労働者が生産への刺激をもち、こうして富の発展が保証される、ということである。しかし彼らは、マルサス学派の次のような見解、すなわち、地主や国家と教会の冗職者や怠惰な従者連中全部が、最初に資本家の生産物の一部を一なんの等価も与えずに—（ちょうど資本家が労働者に対してそうするのと同様に）取得しなければならないのは、そのあとで資本家への利潤を加えて資本家から彼らの商品を買いとるためである、という見解に腹を立てている。といっても、リカード学派は同じことを労働者に向かって主張しているのであるが。（傍点部強調はマルクス）」（K. Marx, *Theorien, Werke* Bd. 26, Teil 3, S. 16, 邦訳, 16頁。）

マルクスのこの評言は、直接には、マルサス

86) 「強度としての需要」の定義については、T. R. Malthus, *Definitions in Political Economy*, 1827, p. 245, 玉野井芳郎訳『経済学における諸定義』岩波文庫, 1950年, 183頁, を参照されたい。

87) Cf. T. R. Malthus, *Principles*, 1ed., p. 489, 邦訳（下）354頁, 参照。

の利潤論の批判という文脈の中で述べられたリカドゥへの皮肉である。ここにみてとりたいのは、商品流通における等価交換の原則を侵犯することなくいかに利潤＝剰余価値の生産を説きうるかという問いに対して、両者がともに、解答を与えることができていない、という構図である。本章での考察は、経済循環およびそこに登場する経済主体に関する両者の理解を確認し、《市場論的世界》と《分配論的世界》の位相差についての認識を、資本蓄積・再生産という基本問題に照らして問うというかたちで、マルクスのこの評言を敷衍したものであると言ってもよい。ただ、ここであくまでも強調しておきたいのは、マルクスのこの評言を、単に利潤論の枠内でおさえるのではなく、リカドゥとマルサスの経済循環の認識に照らしながら敷衍したということである。というのも、リカドゥとマルサスの論争が、まさに恐慌論上の対立として顕現してくる事情を説くためには、彼らの経済循環の認識の解明が不可欠のことと思われたからである。本章で示した、生産の立場（リカドゥ）と消費の立場（マルサス）との対立は、上のような問題意識に基づいて提出されたものであり、その意味での制約をもったものである。したがって、当該論争の全経過を、以上のような対立構図において一概に論ずることはもちろんできない。ただ、複雑多岐にわたる論争の経緯の中から、経済循環についての両者の認識とそこでの対立を、そのものとして取り出すことは、古典派恐慌論の批判にとって意味あることと思われるのである。それについては本稿のしめくくりの部分で述べることとし、ひとまず本章の考察を終えたい。

お わ り に

これまで、一般的供給過剰の可能性をめぐるリカドゥとマルサスの論争を分析してきたのであるが、その中心的課題は、経済循環とそこに登場する経済主体についての両者の認識を採

り出すことであった。こうした課題設定をしたのは、当該論争における両者の対立が、まさに恐慌論上の対立として顕現してくる事情を説くためには、価値論や利潤論には解消しえない、経済循環に関する独自の認識を問うことが不可欠のことと思われたからである。そこで得られた結論については繰り返すことをしない。ここでは、本稿の結論をもとにいくつかの論点を提示しつつ、これまでの考察の意味を考えることとしたい。

まずはじめに、マルクスによる「販路説」批判の問題にふれておきたい。

マルクスが一貫して「販路説」を批判した事実については多くを語る必要はない。問題はその内容である。一般に、マルクスの「販路説」批判の核心は、商品流通に胚胎する商品－貨幣関係の矛盾の剔抉にこそある、とされている。この理解は、それ自体としては誤りではない。しかし、「販路説」が、経済循環とそこに登場する経済主体についてのリカドゥ流の認識に基づくものであるとすれば、「販路説」批判もまた、そこまでの広がりをもつものでなければならない。さらに、マルクスの「恐慌の可能性」論が、他ならぬ「販路説」批判の脈絡の中で論じられていることを考えれば、「恐慌の可能性」論も、上に述べた広がりをもつ「販路説」批判の上に構想されねばならないであろう。「恐慌の可能性」論は、マルクス自身が、極めて抽象度の高い論理学上のカテゴリーを多用しているということもあって、しばしば思弁的に語られがちであった。そうした弊を避けるためにも、マルクスの「恐慌の可能性」論の批判対象が明確に意識されていなければならないと考えるのである。第Ⅰ章補説で論じたように、「恐慌の可能性」論の展開は、需給範疇把握の上向論理と基本的に照応している⁸⁸⁾。したがって、「恐慌の可能性」論の批判対象たるべきは、「販路説」を支えている経済循環およびそこに登場する経済主体についてのリカドゥ

88) 前掲拙稿(1)、182-184頁、参照。

の認識全体であり、また、そこに現われ出ている、彼独自の需給範疇把握である。「恐慌の可能性」論に関しては、こうした対象設定が可能だと思われるのである。

次に、リカードゥーマルサス論争の対立構図そのものとマルクスとの関連についてみてみよう。周知のとおりマルクスは、いわゆる「生産と消費の矛盾」を「恐慌の究極の根拠」⁸⁹⁾として提示した。この矛盾の内容をどうとらえるかについては数多くの見解があり、ここで一概に論ずることはできないが、ひとまずは、一方における生産の無制限的発展と、他方における労働者階級の狭隘なる消費限界とのあいだの矛盾⁹⁰⁾であるとしておこう。マルクスが提示したこれら相矛盾する2つの傾向は、リカードゥーとマルサスの対立そのもののうちに、ひとつの理論的表現を見出すと言ってよい。諸財貨に対する人間の欲望は無限であり、したがって、欲望＝消費のために行なわれる生産もまた無限であるとするリカードゥーの立場が一方の側にある。他方の側には、生産的階級、とりわけ労働者階級の消費は、資本蓄積によって増大した生産物に対する有効な需要を形成しえず、不生産的消費者の存在が不可欠であるとするマルサスの立場がある。いうなれば、先に示した相矛盾する2つの傾向が、リカードゥーとマルサスのうえに分裂して投影しているわけである。この事態を別様に論ずれば次のようになる。マルクスはある箇所ではいわゆる「生産と消費の矛盾」を、直接的搾取（剰余価値の生産）の諸条件と、その実現の諸条件との、時間的・空間的、および概念的な不一致として措定している⁹¹⁾。リカードゥーとマルサスは、剰余価値の生産と実現との諸条件の不一致を、概念的に論じうる地点にはない。というのも、両者の概念的不一致を論じうるためには、マルクスも言うように、資本主義

の生産を「享楽を直接的な目的とする生産」としてとらえることの誤り⁹²⁾から脱却していなければならないからである。彼らがこの誤りにとらわれるかぎり、直接的搾取（剰余価値生産）の諸条件とその実現の諸条件との概念的不一致は、生産的階級の消費はそれに費やされた以上のものを常に生み出すとするリカードゥーと、不生産的階級による消費の存在によってはじめて利潤の獲得が可能となるとするマルサスとの対立として顕現せざるを得なかったと言えよう。

いずれにせよ、いわゆる「生産と消費の矛盾」は、生産の立場にたつリカードゥーと、消費の立場にたつマルサスとの対立そのもののうちに、古典派的な自己表現を見出すというべきであろう。

ところで、こうした事情に鑑みた場合、マルクスをして「生産と消費の矛盾」の概念的把握を可能ならしめたものは何かが問われてこよう。それは、恐慌現象をとらえる視点の転換である。つまりマルクスにとって恐慌とは、価値というものを生み出し、それに支配されながら自己の欲望を成就せんとして行為している人間、そのような人間のあり方にかかわる事象である。人間はすぐれて欲望の主体であるということから、資本主義的生産を「享楽を直接目的とする生産」とみなすことの誤り、また恐慌を人間の絶対的欲望にかかわらせて論ずることの誤りを、マルクスが再三にわたって強調したのもこのためである。

リカードゥーマルサス論争の対立構図を、とくに経済循環に関する両者の認識に着目しながら、そこにおける生産の立場と消費の立場の対立として描くことにより、「恐慌の可能性」（「販路説」批判）および所謂「生産と消費の矛盾」との関連で、以上のような論点が提示されてこよう。これらの論点の本格的な検討は他日を期さねばならないが、本稿での考察が、マルクスの恐慌論とのかかわりで、以上のような意味をもちうることを確認し、当面の結論としたい。

(完)

89) K. Marx, *Das Kapital* III, *Werke* Bd. 25, S. 501, 邦訳, 619頁。

90) Vgl. K. Marx, *Das Kapital* II, *Werke* Bd. 24, S. 318, 邦訳, 387頁, 参照。

91) Vgl. K. Marx, *Das Kapital* III, *Werke* Bd. 25, SS. 253-255, 邦訳, 306-307頁, 参照。

92) Vgl. *Ebd.*, S. 254, 邦訳, 306頁, 参照。